

執筆者プロフィール(執筆順)

佐渡 敏彦(さど としひこ)

独立行政法人放射線医学総合研究所名誉研究員。1960年、九州大学大学院農学研究科博士課程修了。国立遺伝学研究所、米国オークリッジ国立研究所、放射線医学総合研究所、大分県立看護科学大学で、放射線の遺伝的影響、放射線の免疫系への影響、骨髄移植の免疫学、放射線発がんのメカニズム研究に従事。最近は、放射線発がんのリスク評価の基礎となる線量反応の生物学的意味について考え続けている。

福島 昭治(ふくしま しょうじ)

大阪市立大学大学院医学研究科長兼医学部長、都市環境病理学教授。1967年名古屋市立大学医学部卒。医博。化学発がん、特にリスクアセスメントを研究領域とし、発がん物質のしきい値、ヒト発がん物質ヒ素の実験的証明、がんの化学予防などについて焦点を絞って研究。また、実験的膀胱発がんおよび膀胱の病理、特にチェルノブイリ事故後の膀胱病変を追究している。

甲斐 倫明(かい みちあき)

大分県立看護科学大学人間科学講座環境科学研究室教授。1981年、東京大学大学院工学系研究科修士課程修了。日本原子力研究所環境安全研究部、東京大学医学部放射線健康管理学教室、米国Fred Hutchinson Cancer Research Center(客員研究員)、東京大学大学院医学系研究科量子環境医学。現在、低線量放射線リスク評価のための、生物の仕組みに立脚した数理モデルの開発、リスク論に関心を持って放射線防護の基本問題に取り組んでいる。

前川 昭彦(まえかわ あきひこ)

財団法人佐々木研究所研究所長。1968年、名古屋市立大学大学院・医学研究科修了、名古屋市立大学医学部第2病理学教室、国立医薬品食品衛生研究所・安全性生物試験研究センター病理部、(財)佐々木研究所病理部で、人体および実験病理学を学ぶかたわら、医薬品を含む各種化学物質の毒性・発がん性およびリスク評価にかかわる研究に従事。最近は、主として環境化学物質の雌性生殖器に対する内分泌攪乱作用とリスク評価についての研究を行っている。

清水由紀子(しみず ゆきこ)

財団法人放射線影響研究所(放影研)疫学部副部長。1973年広島大学理学部数学科卒業。1982年広島大学にて医学博士取得。原爆傷害調査委員会(放影研の前身)、放影研を通して、原爆被爆者の追跡調査に従事している。特に人における放射線影響に関して最も重要な疫学調査である放影研の寿命調査研究に携わっている。

島田 義也(しまだ よしや)

独立行政法人放射線医学総合研究所低線量生体影響プロジェクトリーダー。1985年東京大学大学院理学研究科博士課程修了。新技術開発事業団水野バイオホロニクスプロジェクト、(都)老人総合研究所、ウィスコンシン大学、放射線医学総合研究所で、血管の老化、マクロファージの老化、放射線発がんのメカニズム研究に従事。

大津山 彰（おおつやま あきら）

産業医科大学医学部放射線衛生学講座助教授。1983年酪農学園大学大学院獣医学研究科獣医学専攻修士課程修了。平成元年獣医学博士（北海道大学獣医学部）。国立がんセンター研究所放射線研究部で、放射線誘発マウス皮膚がんのしきい値様線量存在の研究に従事。現在は、*p53*遺伝子の放射線発がん抑制作用や放射線誘発突然変異の機能細胞における経時的動態について調べている。

稲葉 次郎（いなば じろう）

独立行政法人放射線医学総合研究所名誉研究員。1963年東京農工大学農学部卒。放射線医学総合研究所において36年にわたり内部被ばく放射線安全研究に従事，その後財団法人環境科学技術研究所で環境安全研究に従事した。この間，米国コーネル大学，国際原子力機関に出向。国際放射線防護委員会の第2専門委員を務めた。

渡邊 正己（わたなべ まさみ）

京都大学原子炉実験所放射線生命科学分野教授。1972年金沢大学大学院薬学研究科修了。1976年薬学博士（東京大学）。金沢大学薬学部助手，ミシガン州立大学がん研究所研究員，横浜市立大学医学部助教授，長崎大学薬学部教授を経て現職。その間，一貫して，放射線による細胞がん化と制がんの基礎研究に従事し，その成果から，放射線発がんの突然変異説に疑問を投げかけている。